

## 現代文・知識

(問題冊子 p.54 ~ p.53)

### 解答

- 1** 問一 (1) きんかい (2) まんきつ  
問二 (1) (3) しょさい (4) さんか  
(3) 贈呈 (4) (2) 弧  
問三 (1) 十・十 (2) 千・万 (3) 一
- 2** (1) (4) ① (2) ② (3) ③  
(4) (1) ④ (5) ② (6) ③
- 3** (1) (2) おくび (3) 笑み  
(4) 図首 (5) つむじ (6) 目  
(7) 鼻悦 (8) くくる (9) 腹

### 解説

#### 1

問一 漢字の読みの設問。

- (1) 「金塊」は、「きんかい」と読み、金のかたまりのこと。「塊」には「かたまり」の意味がある。
- (2) 「満喫」は、十分に満足するまで味わうこと。
- (3) 「書齋」は、読書や書き物をするための部屋のこと。
- (4) 「傘下」は、中心的な人や勢力のもとに、同志が寄り集まること。

問二 漢字の書き取りの設問。

漢字の書き取りは、傍線部だけを見て解答すると間違ってしまうことがある。同音異義語(同じ読み方をするが別の意味をもつ語句のこと)に注意し、文脈をふまえて解答しよう。

- (1) 「請求」は、こいもとめること。
- (2) 「弧」は、弓なりの形や曲線を示す。「孤」(ひとりであるさま)と書き間違わないようにしよう。
- (3) 「贈呈」は、人に物を差し上げること。
- (4) 「軟化」は、もの・態度などがやわらかくなること。

ること。「難化」(むずかしくなること)と書き間違わないようにしよう。

問三 四字熟語に関する設問。

- (1) 「十人十色」は、好み・思いなどが一人一人ちがうこと。
- (2) 「千変万化」は、「せんべんばんか」と読む。さまざまに変化すること。
- (3) 「一部始終」は、ことの始めから終わりまでのこと。

**2** それぞれの誤答を確認しよう。

- (1) ②の「イニシアチブ」は「率先して物事をすること・主導権」。③の「クリエイティブ」は「創造的・独創的なこと」。④の「ポジティブ」は「積極的なこと」。
- (2) ①の「プロセス」は「過程・工程・手順」。③の「カリキュラム」は「学校教育で、教育内容を系統立てて配列したもの」。④の「ブランド」は「銘柄・商標」。
- (3) ①の「モチーフ」は「芸術や小説などで表現の動機となった中心思想」。②の「メッセージ」は「伝言やあいさつのことば」。④の「プロット」は「物語や小説などの筋・構成」。
- (4) ①の「ノウハウ」は「産業上有用な技術・また、それに関する知識や経験など」。②の「イマジネーション」は「想像・想像力」。③の「インスピレーション」は「突然頭にひらめくすばらしい考え・啓示・靈感」。
- (5) ①の「アンソロジー」は「詩歌や文芸作品などの選集」。③の「テクノロジー」は「科学技術・工業技術」。④の「ソシオロジー」は「社会学」。
- (6) ①の「イズム」は「主義」。②の「セオリー」は「理論・学説」。④の「モラル」は「倫理・道徳」。

# 古文・知識

(問題冊子 p. 42 } p. 38)

## 解答

### 1

- (1) (7) (4) (1)  
 (2) (10) (7) (4) (1)  
 (3) (1) (10) (7) (4) (1)  
 (4) (1) (10) (7) (4) (1)  
 (5) (1) (10) (7) (4) (1)  
 (6) (1) (10) (7) (4) (1)  
 (7) (4) (1) (10) (7) (4) (1)  
 (8) (5) (2) (8) (5) (2)  
 (9) (6) (3) (9) (6) (3)  
 (10) (5) (2) (8) (5) (2)

### 2

- (1) (10) (7) (4) (1)  
 (2) (1) (10) (7) (4) (1)  
 (3) (1) (10) (7) (4) (1)  
 (4) (1) (10) (7) (4) (1)  
 (5) (1) (10) (7) (4) (1)  
 (6) (1) (10) (7) (4) (1)  
 (7) (4) (1) (10) (7) (4) (1)  
 (8) (5) (2) (8) (5) (2)  
 (9) (6) (3) (9) (6) (3)  
 (10) (5) (2) (8) (5) (2)

### 3

- (1) (7) (4) (1) (10) (7) (4) (1)  
 (2) (1) (10) (7) (4) (1) (10) (7) (4) (1)  
 (3) (1) (10) (7) (4) (1) (10) (7) (4) (1)  
 (4) (1) (10) (7) (4) (1) (10) (7) (4) (1)  
 (5) (1) (10) (7) (4) (1) (10) (7) (4) (1)  
 (6) (1) (10) (7) (4) (1) (10) (7) (4) (1)  
 (7) (4) (1) (10) (7) (4) (1) (10) (7) (4) (1)  
 (8) (5) (2) (8) (5) (2) (8) (5) (2)  
 (9) (6) (3) (9) (6) (3) (9) (6) (3)  
 (10) (5) (2) (8) (5) (2) (8) (5) (2)

## 解説

1 古文には平安中期ごろの表記による歴史的仮名遣いが用いられている。この仮名遣いは、現代語と違って、発音と表記とが一致しなかったり、現代では用いられない仮名によって表記されていたりしているが、今後古文で文章を読んだり、古典文法の学習を行ううえで必要となるものなので、特に現代表記と異なるものを中心に、音読しながら慣れていくのがよいであろう。

以下に「歴史的仮名遣い」の音読上の注意項目を示しておくので確認しておこう。

- 語中語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」  
 ↓「ワ・イ・ウ・エ・オ」の発音となる。  
 〈使ひけり→使いけり〉
- 長音(長く伸ばして発音するもの)の場合  
 \* 「あう・あふ」(au・ahu) → 「オウ」(ou)  
 〈やうに「yau」に〉 → ように「you」に〉  
 \* 「いう・いふ」(iu・ihu) → 「ユウ」(yu)  
 〈いうなり「iuなり」〉 → ゆうなり「yuなり」〉

\* 「えう・えふ」(eu・ehu) → 「ヨウ」(you)  
 〈けふ(今日)「kehu」〉 → きょう「kyou」〉

- 「ゐ・キ」は「イ」、「系・エ」は「エ」  
 「を・ヲ」は「オ」と発音する。  
 〈ゐなか→いなか(田舎)〉 〈ゑ系→こえ(声)〉
- (1) 「したかはむ」の「は」と「む」を直す。
- (2) 「思ひのごとく」の「ひ」と「のたまふ」の「まふ」を直す。
- (3) 「うつくしう」の「しう」と「ゐたり」の「ゐ」を直す。
- (4) 「たふとく」と「おほしけれ」の二箇所を変えろ。「たふとく」は「た・ふ」を「トウ」と読む。後半部、「おほしけれ」の「は」は語中にあるので「ワ」と読む。
- (5) 「ひと系」の「系」と「いらへむ」の「へ」と「む」に注目。「系」はワ行のエで、現代かな遣いでは「え」。また、語中にある「へ」は「エ」と読む。
- (6) 「わづらはしく」の「づ」と「は」を直す。語頭以外の「は」は、現代仮名遣いでは「わ」となる。
- (7) 傍線部分は「けふあす」であるが、発音上問題になるのは「けふ」の部分。「kehu」が「kyou」となり、「キョウ」の発音となる。
- (8) 「かうおほとのごもる」の「かう」と「ほ」を直す。
- (9) 「作りやう」の「やう」を直す。
- (10) (7)と同様、「なんでふ」の「でふ」(dehu)が「kyou」となり、「ジョウ」という発音になる。

## 2

- (1) 中学校で学んだ口語文法の知識を活用し、古文における基本的な品詞が理解できているかを問う設問である。
- ㊐ 「をのこ」は「男性」という意味を持つ名詞。
- ㊑ 「拵て」は、前もって、自分や他人の行動を決定することを意味する下二段活用<sup>おき</sup>の動詞の連用形。終止形は「拵つ」。ここでは、「指図する」の意味。
- ㊒ 「高き」は、「木」を修飾する形容詞の連体形。終止形は「高し」。このように古文では形容詞の終止形は「し」で終わる。

- ㉔ 「て」は接続詞。
- ㉕ 「す」は「する」という動作を意味するカ行変格活用の動詞の終止形。  
古典文法の基本となる三つの自立語(用言)について、以下にあげておく。  
\* 物事の動作を表し、言い切ると「ウ段」で終わる言葉。  
↓ 動詞 (思ふ〔思フ〕・見る〔見ル〕)  
\* 物事の性質や状態を表し、言い切ると「シ」で終わる言葉。  
↓ 形容詞 (無し・美し)  
\* 物事の性質や状態を表し、言い切ると「なり」  
「たり」で終わることが多い言葉。  
↓ 形容動詞(静かなり・堂々たり)
- (2) 品詞の知識を確認する設問である。
- ㉖ 「初心」は名詞。
- ㉗ 「かへる」はウ行四段活用の動詞。終止形も「かへる」。ここでは、現代語と同じ意味で用いられている。
- ㉘ 「よくよく」は「念を入れて」「はなはだしく」という意味の副詞。
- ㉙ 「べし」は意志・推量・命令などの意味を持つ助動詞。
- ㉚ 「正しかる」は形容詞。終止形は「正し」である。

3

- (1) 「ためし」は①「前例・例」②「手本・規範」の意。
- (2) 「そらごと」は「うそ・偽り」の意。
- (3) 「一期」は「一生・生涯」の意。
- (4) 「たがふ」は①「異なる」②「間違う」の意。
- (5) 「あらがふ」は漢字で表すと「争ふ」となる。特に、言葉で争うことを意味し「言い争う・反論する」という訳があてはまることが多い。
- (6) 「さうなき」は「双無き」の漢字があてられ、「二つとない」という意味をもつ。
- (7) 「よろづ」は「万」の漢字があてられることがポイント。数の多いことを表す語。
- (8) 「さはる」は①「さしつかえる・さしさわりがある」②「邪魔になる」の意。
- (9) 「世」は基本的な古語。「世間」の意味であることを覚えておこう。また「そしり」は現代語にもある「そしる」(悪口を言う・いやみを言う)の意味。
- (10) 「とく」は「早く」の意味であり、文脈上は、

㉛の「さつそく」があてはまる。この語も基本的な古語であるので意味を覚えておこう。

古文・読解

(問題冊子 p. 37 ~ p. 36)

解答

- 問一 ㉗ ③ ㉙ ②
- 問二 A ② D ①
- 問三 ①
- 問四 ④
- 問五 ②
- 問六 僧がこの兒を行かない所のないほどくまなく捜し求めるけれど、まったく見つからない。
- 問七 ②

解説

問一 文脈を丁寧に追い、会話文の主語を正しく理解しているかどうかを問う設問である。  
波線部㉗の場合、主語との間に「師」(僧)の言葉が狭まった形となっているものの、文脈に従って読めばおのずと解答に至るであろう。波線部㉙も、少々離れた部分に示されている主語をとらえる問題となっている。波線部㉕同様、文脈に従った理解が要求される。

問二 本文中の基本的な単語の解釈を問う設問である。  
傍線部Aの直前にある「官」は「官吏・役人」を意味する単語である。このほかに、「わざと」の語が「わざわざ・とりたてて・特に」の意味で用いられていることに注意する。  
傍線部Dのポイントは、「いづち」「どこへ」を意味する単語である。したがって、「いづちともなく」から「どこへともなく」という解釈を想定することができれば答えは導ける。

問三 問一が人物を問うているのに対して、この設問は、主語の省略されている文章において、前後の文脈から推測して主語を補う設問となっている。「師これを受けず」の「これ」が指しているものと、傍線部B直前の文章の「学問をこそせめ」(学問をすることがよい)という意味がおおよそ理解できていれば、僧が、何を「不適当」といつて「いさめ」ているのかは把握しやすい。

問四 「これをよむ」の「これ」の指示内容を問う設問である。問一・問三を解きながら、文脈を逐一正確におつて意味を押さえている人にとっては、難しくはないであろう。

古文では主語の省略が特徴であるため、まず第一に、文章の流れに従つて、だれが何をどうしたのか、ということをつめて読むことが大切である。その際に、指示語の内容に注意する。このことは古典ばかりではなく、現代文を読むうえでもよく注意されることである。古文が現代文と大きく異なるところは、用いられている言葉が古語であるという点のみであり、文章に接する態度は現代文と同様の心構えが必要となる。

問五 「師」の述べた言葉がどこまで続くかを問う設問である。

会話文においては、「」と「と」で示される、「と」または「とて」が、会話の終わりを探す目安となる。したがつて、極端に言えば内容が十分に理解できていない場合であつても、形式的には引用を示す格助詞「と」の受ける部分を見つければ、会話文の箇所がわかることもある。

この設問の場合のように、「と」でなく「など」で受けることもあるので覚えておくとよい。

問六 傍線部までの文脈を踏まえて現代語訳する設問である。

まずは傍線部Eを直訳する。

「至らぬくまもなく」の「くま」に「限（しずみ、という意味）」という漢字があてられ、「行かない所のないほど隅々まで」という意味。「更になし」はここでは「まったく見つからない」という意味である。設問文に「人物を補つて」とあるから、誰が、誰を捜し求めたのかを文脈からしつかり判断しなければならない。

問七 この話全体が何を中心に述べているのかを考える設問である。ただし設問の要求が「合致しないもの」を選べとなっている。設問文の読み誤りに注意する。

「師」は「児」が仏道修行をしていることに対して、「幼い時は学問をするのがよい。（仏道修行は）ふさわしくない。」と述べているので、②は本文に合わない。

### 【現代語訳】

奈良の松室というところに僧侶がいた。官職などにはことさらにならなかつたが、徳があつて用いられた僧侶であつた。そこに、幼い児で、そ

の僧が、特に可愛がつているものがいた。その児が、朝晩法華経を読み申し上げたところ、師はこれを認めず、「幼い時は学問をするのがよい。（説経は）不適當だ」などと注意されて、（児は）一度は従うようであるが、どうにかすると、こつそり忍んで、これ（法華経）を読む。どんなにか（修行に対する）こころざしが深いことと思つて、後では、だれも（児を）注意しなくなつた。

こうしているうちに、十四、五歳ほどになると、この児はどこへともなくいなくなつてしまつた。師は大変驚いて、行かない所のないほど隈なく捜し求めるけれど、まったく見つからない。「何かの靈にさらわれてしまつたようだ」と言つて、泣く泣く死後の申いをして終わつてしまつた。

出典 鳴長明 『発心集』